

臨床宗教師を養成 准教授招き講演会 看取りの現場 まず自分の理解を

乙訓医師会



看取りや臨床宗教師をテーマに行われた乙訓医師会の講演会。長岡京市立多世代交流ふれあいセンター

在宅医療や介護を担う専門職の人々に、超高齢多死時代を見据えて死生観を養ってもらうと、乙訓医師会（橋本京三会長）は26日、長岡京市立多世代交流ふれあいセンターで、「臨床宗教師」を養成している東北大学の谷山洋三准教授（臨床死生学）を招いて講演会を行った。

「死後の世界話していい」関心高く

「死に寄り添う臨床宗教師の立場から」。

谷山准教授は「ケアの基礎は相手の価値観を認めること。そのためにまず自分自身を理解することが大切だ」と指摘。その上で「自分の価値観を変える必要は

ない。相手の価値観に敬意を表し、変わるのを待つてほしい」と述べた。

また、「ケアの場面では相手の感情に焦点を当てつつ、共感して話を聞いてほしい」と呼びかけた。

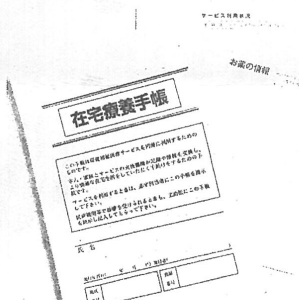
さらに「自分の死生観を確認することがケアの準備につながる」と指摘。患者や家族の思いを知るためにも、職場で死について話し合うことや、自分が遺言を書くことなどを勧めた。

同様にケアマネジャーの今井里奈さん（40）は「これまで死後の世界のことを口にするのは気恥ずかしかったが、高齢者に希望を持っていたら、話していいのだと思えた」と感想を語った。

また、障害者施設で生活支援員を務める奥村美佳さん（37）は「専門職同士の価値観の違いを解消したり、親御さんのケアに当たったりと、障害者福祉の現場でも宗教者が果たせる役割があると思う」と期待感を示した。

今回の講演会を踏まえ、

専門職連携で注目 乙訓地域の参加者ら



乙訓医師会が発行する「在宅療養手帳」。持ち歩けるカルテとして活用されている

発行する「在宅療養手帳」。いわば持ち歩けるカルテとして、在宅で療養する高齢者らが地域のどの病院や介護施設を利用しても、健康状態や介護サービ

乙訓医師会では来月2月27日、長岡京市中央生涯学習センターで「人生最期の過ごし方」と題する一般向けのシンポジウムを開く。

（小野木康雄）